

学会ニュース

日本女性学会

第26号 1985年11月

目 次

特集 私のナイロビ会議

- 「国連婦人の十年」ナイロビ会議 NGOフォーラムに参加して …矢木 公子… 2
- ナイロビで出遇った女たち ………………國信 潤子… 7
- NGOフォーラムに参加して ………………加藤春恵子… 8
- THE CHALLENGE OF “POST-NAIROBI”
FEMINISM レベッカ・ジェニスン… 10
- <会員投稿>女子労働の問題点 — パートタイム労働の現状 — … 小林 晋子… 12
- 研究報告会のお知らせ ……………… 14
- 合宿して「私の女性学イメージ」を語りませんか? ……………… 14
- 新入会員紹介 ……………… 16
- 編集後記 ……………… 16

「国連婦人の十年」ナイロビ会議

NGOフォーラムに参加して

矢木 公子

1975年の「国際婦人年」を皮切りに、文字通り女性の熱心な働きかけによって、メキシコ会議から中間年のコペンハーゲン会議をして最終年の今年ナイロビ会議の開催へと引き継がれてきた「国連婦人の十年」である。いずれの会議においても、政府間会議と並行してNGO（非政府機関）フォーラムが催されて「国連婦人の十年」が草の根の活動に支えられていることを、如実に示してきた。私自身は今回始めてNGOフォーラムに参加しただけなので、過去2回のフォーラムの状況とナイロビの場合を内側の目から比較するということはできないが、新聞・雑誌によるマスコミ報道や参加した人たちの体験談を通して感じたぞくぞくする程の女性たちの熱気というものを、ある場合にはやむにやまれぬ状況への怒りに似た気持というものを、ナイロビではそれほど強い印象とはならなかった。それはフォーラムでは全体会がなく、数多くの催しが同時に進行しているため、たまたまそのような場に居あわせないということが大きく作用しているだろうし、またあの陽気な踊りで人々の気持をなごませるアフリカの人たちが色彩豊かな民族衣装で潤歩する雰囲気「対立よりも調和」という雰囲気を作りだしたのではないだろうか。私自身の状況からいえば、中間年のコペンハーゲン会議での女性学ワークショップを受けて82年に開かれたモントリオール、コンコーディア大学シモーヌ・ド・ボーボワール研究所主催「第一回女性に関する研究と活動の国際会議」の際には大学の寄宿舎に寝泊りしたので、そしてその節には全会期を通じて午前中に全体会議で参加者350名が一堂に集まり、午後からは分科会というスタイルで共通の話題や意見交換したい点が出てくるので食事中も部屋に戻ってからも往復のバスの中ででも話しあうということが可能だったけれども、今回は主会場のナイロビ大学やダウン・タウンから車で約15分ほど離れたホテルに滞在したこと、足を痛めているのでグループでチャーターした送迎の車に律儀につきあって一日のワークショップが終ると即ホテルに戻っていたこと等でグループ内の人との情報交換以外にはあまり広がりをつけることができなかった。前置きが長くなったが今少し本題に入る前にナイロビの印象を述べておきたい。

NGOフォーラムは7月15日から始まる政府間会議に先立って7月10日から19日までの10日間開催されたが、私たちのグループ（「日本の女たち（スワヒリ語でWanawake wa Japani）」）は他の多くのグループの人たちと同様7月12日に日本を出発した。これはナイロビに入るのにヨーロッパやアメリカを経由しない限り、カラチやセイシェルス経由の便が一週

間の内金曜日しかないために、時間的余裕や都合のつく人々は会期前にナイロビに入ったが、その都合がつかなかったり座席が確保できなかった人は、会期が始まってから参加ということになった。したがってオープニングセレモニーに「日本の700名が参加していても目立たなかった」という新聞報道はあまり正確ではないのではないと思われる。そしてまた13日夕方に到着したナイロビの空港の様子も新聞報道のいう「普段通り」ではなかった。空港では飛行機が到着すると会議参加者は一般乗客と分けられてほとんどフリーパスで入国した。一年半前の12月に訪れた時とは比べものにならない位のスピード・アップであった。その後換金窓口は相変わらずのんびりさではあるが、それでも街中の銀行窓口より手際がいい。迎えの車で暗くなってきた街中を抜けてホテルへ迎う途中の公園の脇に小銃を肩にかけてこちらをみている兵士の姿を目にする。ホテルに入ると二人連れのガードマンが庭を巡回している。食堂の客は会議関係者ばかりで、12月から1月といったヨーロッパからの避寒客の家族連れや白人男性が黒人女性と連れだって食事をしている光景は皆無である。私は前の旅行の時も同じホテルに泊ったので、その違いを大きく感じた。翌日(14日)は日曜日なのでワークショップは催されないけれども会場の様子を把握しようとナイロビ大学に出かけたが、街の要所要所には軍人や警官の姿がかならずあり、変に街の様子がおとなしく整然とした印象をもつ。その後ダウン・タウンに行った時も何か閑散とした印象を受ける。道路にたむろしていた物乞いや障害者や失業者といった人たちの姿がみあたらない。その人たちや売春婦の団は、強制収容されて遠隔地に連れていかれたという。時々道路補修や大学構内でもワークショップの最中にペンキの臭いをかぐが、それらはこの会議に先立って始められたが間に合わなかったもので、しかし8月にローマ法皇の訪問と国際学会があるのでまだ続けているのだという。ケニアのナイロビは、従来から数多くの国際会議や催しをしてきた近代都市ではあるけれども、そしてケニアが天然資源をほとんど持たない観光立国であるけれども、政府間とNGOの参加者約1万5千名を受け入れるのは並大抵ではなかったであろう。NGOのオープニングセレモニーが行われ政府間会議の会場となったケニヤッタ国際会議場近く、一番の目抜き通りであるケニヤッタ通りに「ケニアは「国連婦人の十年」の会議のホスト国であることを誇りに思う」という英文横断幕を見た時、最貧国に属するケニアがこの大役を引き受けたのだ、日本からもっともっと参加してもよいのではないかと思った。その開催への努力は、想像以上のものだったのではないだろうか。もちろん、ヨーロッパの女性のように、自分たちが参加するお金を一人でも多くのアフリカ女性が参加することにまわすという方法もひとつの賢明なそして美しい行為であるけれども、日本の場合にはアフリカを始めとする第三世界との関わりが、ヨーロッパやアメリカ・カナダの場合とは、歴史的・地理的に異なっている。特にアフリカとの関わりの場合、ヨーロッパでは日常的な視野にアフリカが入っていて、出かけていなくても様

子がわかるというところがある。ところが日本の場合、いくらマスコミで南アのアパルトヘイトについて報じていても日常感覚と無縁のところに残っている。クルーガーランド金貨を身近においても平気だし貿易関係がどうなっていくと無自覚である。日本からアフリカ大陸の状況は、飢餓問題以外みえないし、ナイロビから「筑波の科学万博」もまったくみえなかった。ところが10日程後に訪れたアメリカ中西部の小さな町からは筑波がみえていて人々が見学を訪れているのである。アフリカから（そして世界各地から）人が集まってくる機会を日本が積極的に引き受けない限り、こちらから出かけていかななくては交流は不可能である。

「国連婦人の十年」のメイン・テーマは「平等・発展・平和」であることは、周知の事実であるが、ナイロビのNGOフォーラムは次のような12の分野に分けてワークショップやフィルム・ビデオといった視聴覚のフォーラムを催し、その他音楽会やアフリカン・ナイトといったさまざまな文化的催しを行なった。このような多彩な催しはナイロビ大学を主会場として7・8ヶ所に分かれて行われた。12の分野は、「発展・平等・平和・健康・教育・雇用・若者・老人・移民・難民・緊急事態における女性・メディア」である。このような分野に対して世界中の女性が1日150ほどのワークショップを開いた。アジアの女性が行なったAWRANのワークショップでもその他多くのワークショップがとりあげ、カフェテリアや食堂でテーブルを同じくした者が語り合ったのが「売買春問題」であり、日曜日のキャンパスでも訴えられていたのがピース・センターの「平和と戦争、植民地支配・ネオ植民地支配と女性の被抑圧状況」であった。

日本女性学会から出発前に様子を見て報告するようにといわれたWomen's Studies Internationalは、15ヶ国26機関から構成され10日から18日まで4つのパネルと13のワークショップを開いた。最終のワークショップで主催者の一人であるF.ハウは17日までに延1,200人の人がこの会に参加したと、語っていた。私は他のワークショップとの時間的關係や自分たちのグループ発表等との関係で、パネル（そのタイトルは「教育の変革手段（ストラテジー）としての女性学」「女性学の新しい展開」「発展計画の中でのジェンダー」「変革の機関としてのウィメンズ・センター」）にはまったく参加できず、4日間にわずか3つのワークショップに参加しただけであるが、その概要を記して責を果たしたい。15日の4時から1時間半開かれたワークショップ「女性学の教授法」では、まず司令者が女性学の目的は「学生に力^{エン}を与えること」であり、そのために女性学の教授法がとってきたのは、伝統的な教授法に対して少数者への教授、その中で学生が自分の力を自分の中にみいだしていく方法、知識を神秘化しないこと、競争よりも集会的共同制作を行なうこと、教師の一方的講義よりも討論を多くすること、カリキュラムの編成も伝統にとらわれた意識を変革していく5段階にあわせて行なうこと（たとえば歴史学を例にとると、①女性が登場しない歴史の認識 ②歴史の中の女性をそのままみる

③そして歴史の犠牲者としての女性の認識 ④女性と歴史の関係をみる ⑤女性の側から歴史を作り直す、といったカリキュラムを編成する)が、述べられた。続いて日本のレベッカ・ジェニソンさんを含めた6人が自分たちの教授法の現状を報告し、それから意見交換となった。最初にリオデジャネイロのカトリック大学女性学ディレクターのケニー・タバックが、1981年に7人のスタッフで始めた女性学は、当初の「女性と社会」「女性と心理学」といった科目の設定からやがて学部のメジャーとなり、講義と実践を組み合わせたものとなり、調査研究班に分かれて地域の人々との接触をもって学生が社会的現実を体得し、そして教員から直接助言を受ける機会ができたこと。このような授業を3年間継続してきた結果、学生達の同等の進歩が困難なこと、標準をどこに置くか、大きな大学の中でこのような活動を維持することに困難があること等を指摘した。二番目にレベッカ・ジェニソンが、京都精華短期大学での「女性と文学」の授業のやり方を軸にした、日本の大学ではまだプログラムにまで進展していないこと、日本の女子教育で短大が一般的である理由を述べた。授業の中では教師と学生が対等の関係をもつことが困難であること、学生に自発性が欠けていること、言葉の問題のあること、したがって有用な教材がなくその都度手作りであること、手作りの教材では女性の問題と共通する少数者の問題を扱った作品をとりあげていること等をあげた。ウエスト・インディア大学のロドニィからは、学生に男性と女性についての考え方を自由記述させ、その後「女性と法律」「女性と教育」といった研究を行ない、言葉のハンディキャップを補うためにスライドを用いること。その結果5年後には女子学生も男子と同様に変化し、どのように行動するかというレベルにまで意識が変わることを報告した。ブラジルで討論を中心にしたグループ学習で性教育を行なったサンドラが、オープンに主題を語る困難さ、教える側と学習者のハイラキーの問題(すぐに教える側に依存してくる)、そのような中でコーディネーターとしてグループをどの位プッシュするかという問題、当初女性学がもっていた教える側と学習側の対等性が現在の学生からは教える側に自信がないからだと解釈される問題等を指摘した。続いてオランダとインドの場合が報告された後、自由討議ではデンマークの学生から、従来の方法では学生として理解するのがどれ程困難かという問題提起がされ、一緒に踊り、動き、触れることのできる小ドラマやロール・プレイをとり入れる必要性が指摘された。また意識変革を根本に考えなければいけないから学生に「書くこと」を求めてはどうかという提案がなされた。

7月17日の「女性史における新たな発展」では、ペルーのフェミニスト・センターで働いている女性からの批判的アプローチによる歴史研究の必要な段階に女性学が至っているという指摘や、エジプト・アメリカ等からの歴史学の中で女性研究者が開拓してきた分野(家族や家父長制の研究)の指摘やこの十年間社会構造を公的・私的両面から変えていく女性の文化の構築をめざ

す方策・手段の作成が異口同音に語られた。とりわけエジプトのマーゴ・バドランは、今後の女性学に必要なこととして、生物学・心理学・人類学・セクソロジー等々既存分野を結合する方法、そして国際的・国内での・家族内での・個人間での抑圧といった多次元のものを結びつけてゆく方法の開発を指摘した。またトリニダードのレドックは、運動や教育が国際的基盤を必要とするならさまざまな地域の女性の歴史をもとにする必要があると考え、スーダン・ソマリア・インド・インドネシア・ペルー・カリビア海の三つの島を対象とした6ヶ国のプロジェクトを組んだ。その原則は、調査が単に研究自体の成功に留らず研究者の意識変革や状況変革のための戦いにつながり、さらには運動に反映するものであること、そして研究資料が展示・印刷物・テープ・ラジオ・ワークショップ等によって広く利用できることであった。調査法も普通の面接法等の伝統的方法に加えて、集団面接法も用いた。それによって被面接者が特定の問題について自分のみかただけでなく他のみかたのあることを知り、そして共通の認識・理解をもつことができたといった点を、述べた。その他インドのマズムダールからは、植民地下の労働の道具としての女性労働の歴史はみえないものだったところから調査を必要とすることや、18世紀の資本主義の進展していた英国の見地からインドの女性も記録されてきたこと等フェミニストの見地から歴史を見直した時、階級構造等新たな問題がみえてくるので、フェミニスト・パースペクティブから女性の多様なあり方を研究する必要性が指摘された。つまり女性をひとつのカテゴリーでくくってきた従来の研究のあり方を、批判した。

18日に開かれた最後のワークショップは、「リンゲージと従来の発展——ネットワーク内とそれを超えて」と題して次の点についてアイデアを出しあい政府間会議に手渡す声明文を作成して閉じた。今後の女性学の発展に必要なものは、①資料・情報、②その伝達・普及、③リンゲージのモデル、④訓練、⑤学生・教員の交換、⑥対話の問題（会議）である。これらについて、既にどのように取り組んでいるか、また可能な方法と困難な点について発言があいついだ。また声明文は会期中にこのグループのパネルやワークショップにどのような人が参加したかの記述に始まり、正義や平等そして社会参加に対して行なわれている女性の努力・奮闘が、性差別的施策やジェンダーや女性のリアリティの無視によって阻害されている現状、それにも拘わらず女性の経験を除外しない新しいリアリティを追究する学問として誕生した女性学は、発展のために人々を変革していく目的をもつ世界的リアリティとして、学界・女性の組織・マスコミ・公的政策に大きなインパクトを与えてきている。しかし女性学が今後さらに発展していくには、国毎のそして国際的な機関さらには研究機関からの援助が必要であること、さらには女性学と教育システムの改善の關係に触れて終っている。この声明文原案についても、他の参加者から不適切あるいは不明確な語句・表現の訂正が行なわれて、共同作成という感を強くした。

ワークショップについて、ごく大ざっぱにしか述べられなかったが、会期中にWomen's Studies Internationalが主催したパネルとワークショップについての記録が、今秋出版される予定である(10月末現在、申し込みに対して返答がないので、価格も不明であるが)。

(9月14日 研究報告会)

ナイロビで出遇った女たち

國 信 潤 子

1985年7月12日から22日までの10日間は、私の人生の一つの節目となる冒険だった。その冒険はまず、子供二人を10日間、日中はベビーシッターの人に頼むことから始まった。夫は残業をやめて(日本の企業マンにとっては大決心なのだ)、7時に帰宅し家のことをする。ということで10日間私はアフリカという西欧米以外の地球のかなたに出かけた。私が万障繰り合わせてケニアにひきつけられたのは国際婦人の10年、最終年の民間会議であった。ナイロビ大学を会場として世界中の女が、国際婦人年の会議に来る、ということ、それもアフリカのケニアに来るということ、これだけで、来る女たちはいくつかの関門を自ら通ってきていることはわかる。女性差別の撤廃を目ざし、先進国のみでない女たちの声に耳を向け、さらにアフリカという黒人が多数派の世界を理解しようとする、という関門だ。私がナイロビで出遇った女は、大きく、もの静かで、そして生活全てを背負っていた。子育てといっても1人や2人でない。「8人の子があるの」と、全くあたりまえの表情でいう、服とそろいのターバンを上手に巻き上げた女性、年齢は見当がつかない。夫は自分との間の子を捨てて、他の女に走った、生活費など出すわけもなく姿を消した、という女性もいた。余り巨大な体なので会議の間立ったままなのがづらいといって私に椅子をゆずってくれという女性は何とも人なつこくて嫌味がない。昼食のテーブルで相席したイギリス女性は、ジャーナリストとしての自分の活動をまくしたてた、それを横できいていたナイロビ大学で研究中というケニアの女は一言も口を聞かず、ただ坐っていた。私が「ナイロビ大学に女性は何割位いるの」ときくと、「さあー知らない」と考え込んで「 $\frac{1}{4}$ 位かな」と小さな声でいった。教会の聖歌合唱団のコンサートに集まったアフリカの女たちは歌を共に口ずさみ、体を静かにメロディーにのせてゆらし、人が混んできたら椅子を運び込み目いっぱいつめて皆が入れるように協力していた。その教会の外で出されたアフリカの民族食にも大行列ができた。人々は静かにおしゃべりをして一時間は待たされそうな夕食の列を不平をいうでなく、の

んびりと作っていた。彼女たちにもっと日々のことを聞きたかったし、男とのかかわりも聞きたかった。しかし、余りにわずかな時間故、それもままならなかった。ただケニアにはケニアの、あるいは各々の種族の思いがあり、行動様式があり、人間関係の持ち方がある。それは日本のそれとは同じではない。しかし、その別の仕方でも人々は十分にわかり合えるし、ことを運ぶにも支障はない。私達のあたりまえと思うことと、彼女たちがあたりまえと思うことはかけはなれていてもやはり同じ産む性をかかえた女という存在であることは互いの心の糸口を把みやすくしてくれる。アフリカの民芸品の手作りのカゴや器を買うときも女が相手だと値切る気持ちにもぶる。この人は子供をおいて一日カゴを編んだのだろうと思ってしまうから。「私の肌の色は黒」と謳いあげる詩をきいて閉会式にいたアフリカの女たちは「そうだ！」と熱狂した。私はその声に、肌の色に誇りを持ち、共感するアフリカの女たちの連帯をかいま見た気がした。

NGOフォーラムに参加して

加藤 春恵子

今回のNGOフォーラムに行ってよかった、と思う理由は多々あるが、ここでは二点に絞って述べたい。

第一は、女性学と第二期フェミニズムとの不可分性を実感できたことである。第二期フェミニズムは、単なる建前ではなく、きわめて実質的に「平等・発展・平和」の三目標をつなぐグローバルなものとして、国際関係・国内諸関係のマクロな構造的な理解と自我やコミュニケーションのありようへのミクロな認識の深化とを伴いつつ日々成長している。その動きに連動して女性学もあるのだということを、ナイロビの「^{アキコウ}広場」に出てみてはじめて私は理解できたと思う。「フェミニストである」ということだけで人は国籍や階層のくびきから自由になれるのではないこと、むしろフェミニストであるが故に自らが組みこまれた立場から生じる視野の限界や可能性を確かめて「抽象的な個人」の一人よがりや仲良しごっこに終らないフェミニズムの地平をきりひらくことが必要なのだということを、私はそこで痛感した。とりわけてアジアとの関連、日本国内のマイノリティ差別との関連で今後の日本の女性学が組みこむべき一課題を学んだことの意味は大きかった。

第二は、フェミニズムが育ててきた新しいコミュニケーションのあり方がどのようなものか、ということを実感できたことである。「スピーク・アウト」する力、葛藤をオープンに手ぎよく処理する力、立場の違いを認めあいながら互いの「フェミニズム」と「シスターフッド」に信

頼して連帯する力、上から用意されるものを待つのではなく自ら場をつくり出す力——それらは、マイノリティのエネルギーを暴力に流しこむことなくコミュニケーションによる問題解決の新たなカタチとして結晶化させた参加民主主義のエッセンスである。このような新たなコミュニケーション原理はフェミニズム独自のものというより第二期フェミニズムをとり巻いているグローバルな社会運動全体に共通するものであるが、とりわけ男世界の権力抗争・権威主義・形式主義・暴力主義などに反発した女たちの間で尖端的なカタチで具体化されているとみてよいと思う。

一万数千人が単なる「お祭」でなく集まって語り合う「広場」という、男たちが今までつくり出しえなかったものを女たちがつくり出しえたという事実が、そのことを物語っている。社会と個人との関わりを「コミュニケーション論」という観点から学んできた社会学畑の人間である私としては、「フォーラム」というものの意味を現場で確かめられたことを幸いに思っている。勿論、今後の日本での女性ネットワークの発展にナイロビで学んだことを生かしたいと願いながらである。

THE CHALLENGE OF "POST-NAIROBI" FEMINISM

Rebecca Jennison

Like every other individual woman who attended the NGO Forum in Nairobi, I was only able to participate in a very small part of it--ten workshops out of two thousand. To try and write about it is like an ant trying to describe an elephant. Nevertheless, after gathering my thoughts about what I saw and experienced, talking to other women who went and reading reports about the conference, I am able to draw at least one conclusion for myself: after Nairobi, the meaning of feminism cannot be the same.

If one were to judge from the title of NHK's documentary on the conference, "What Are Women So Angry About?", one might mistakenly think that the main purpose of the gathering was to provide a place where women of the world could vent their feelings of discontent. But to come to such a conclusion would be to miss the point of Nairobi. The real news from the Forum is both bad and good. The bad news is that although the work of the decade has brought to light the reality that the majority of women in the world are struggling for survival for themselves and their children, they are not better off than they were in 1975. The good news is that along with articulating outrage in the face of very real forms of oppression, women have worked hard to analyse their situations, to carry out insight-producing research and to take significant action to bring about radical change.

Before leaving for Nairobi, I read an article by Charlotte Bunch in Ms. in which she made a call to feminists in industrialized countries to approach the conference with a broad perspective: "The beginning point at both conferences must be that everything is a woman's issue. That means racism is a woman's issue, just as is anti-Semitism, Palestinian homelessness, rural development, ecology, the persecution of lesbians, and the exploitative practices of global corporations. Domination on the basis of race, class, religion, sexual preference, economics or nationality cannot be seen as a mere additive to the oppression of women by gender. Rather, all these factors help shape the very forms of that oppression." Bunch's statement was not just a counter to Maureen Reagan's highly political view that women's problems and political problems should be kept separate; it was a call to western feminists to be more attuned to the diversity of the forces that oppress women around the world, for without such awareness it will be difficult to form real alliances on a global scale.

In a workshop at the Forum titled, "What is Feminism?" Bunch reminded women of an incident that occurred in Copenhagen in 1980. One day, the quote for the day in the Forum newspaper had been, "To talk feminism to a woman who has no water, no home and no food is to talk nonsense."

Since Copenhagen, western feminists have been learning to listen to the particular problems that face women in the developing countries. At the same time, women working at the grass-roots level with such survival questions as fuel gathering and food production have been able to assert the importance of placing women and their needs at the center of discussions of development. In this way, women are seen within a broader political perspective and feminism becomes more than a phenomenon isolated within certain regions; rather, it is increasingly "an agenda with a world view." Bunch summarized this workshop by saying, "Feminism cannot be separated from politics. Every issue is a woman's issue. Feminism is a perspective on any or all issues. It is a perspective on life. It is a political perspective that comes from women but should become the politics of men."

Another important development that has made this post-Nairobi global perspective on feminism possible is the networking at both the regional and global levels that has gained momentum, particularly in the last three years. One example is the Asian Women's Research and Action Network. Asian women involved in this network have emphasized the need for Asian women themselves to define issues and strategies with the aim of closing the gap between researchers and activists in order to improve the lives of poor women in the grassroots of Asia. Through this process, a working definition of "Asian Feminism" is beginning to emerge. Another network that was started in 1983 is, "International Feminists Working Against Female Sexual Slavery." Members of this network have decided to focus their research and action on the question of "forced" (meaning physically, economically or otherwise structurally forced) prostitution, with the aim of helping women who want to get out of the situations they are in. Detailed reports on the activities of each region are included in the group's first publication, "International Feminists Networking against Female Sexual Slavery" (can be obtained for \$6.00, plus postage, from the International Women's Tribune Center, 777 UN Plaza, New York, N.Y. 10017).

I returned from Nairobi with a sense of urgency. In spite of all of the hard work of women during the decade, along with the worsening of the world's economy, the situation of the majority of women is not improving. More women are in poverty. More women are being trafficked. Indigenous development programs are having more difficulty as military spending rises. One challenge of post-Nairobi feminism is to continue to examine the structures of oppression at the local level as well as in a regional and global perspective. Another and perhaps more difficult challenge is to heed and act on the words of one Kenyan woman, "Please sisters, do not pay us lip service. Take these problems as your own and act on them." Here, it seems imperative to use the knowledge generated by women's studies as a basis for action.

The UN Decade for Women has ended. Some groups--particularly government funding agencies--may want to make us think that this means the tasks of the Decade have been accomplished. But for me, the challenge of Nairobi makes it clear that we have barely begun.

女子労働の問題点 —パートタイム労働の現状—

小 林 晋 子

多くの女性が管理職に就いているとか、女性重役時代とか言われ、いかにも女性が社会的地位を男性並に確保されつつあるような印象を受ける昨今である。確かに一昔前よりはましな地位に着ける女性も出てきてはいるし、批判が多いとはいえ「男女雇用機会均等法案」が4月25日の参院社会労働委員会で可決され、今国会での成立が確実になったりもして徐々に女性の労働条件も改善されている。しかしその一方で労働条件の悪い（労働関係法令に抵触する場合もある）パートタイム労働に多くの女性労働力が吸収されていることも事実である。このパートタイム労働は単なる労働条件の問題というだけでなく、そこに従事するのがほとんど女性であることを考えるなら、女性問題という視点から考察してみることも必要と思われる。

パートタイム労働自体が明確に定義されていない為、昭和59年11月に労働省から「パートタイム労働対策要綱」が出された。それに依ると、(1) 1日、1週間または1ヶ月の労働時間が同程度の業務についている労働者の労働時間より短い。(2) 処遇や労働条件では通常の労働者と区別されているのに労働時間はほぼ同じ。このような定義になると季節労働者や繁忙期の補助的労働者は統計からはずれるし、この定義に対応する統計も存在しない。例えば「週35時間未満労働者（非農林業）」による女子労働者は328万人。「企業でパートタイマーの名称で呼ばれる女子労働者」は351万人。「1日の所定労働時間または一週間の労働日数が一般労働者より少ない常用女子労働者」は127万人ともいわれている。このように定義が若干異なるだけで統計値に差異が出てきて正確な実数を把握できないことは裏をかえせばそれだけパートタイム労働者に身分保証がなされていないことになる。

女子の労働市場への進出が顕著となったのはオイルショック以降この10年程で、昭和50年から57年までの就業者の伸びは女子は1.7%と男子0.7%に対しその伸びを上回っている。これは労働需要面で女子労働に頼る割合の高いサービス部門での雇用が伸びたことに依るが、これが急激なパート化を伴っていることが特徴である。また昭和58年労働白書でも「パートタイム等の形態での就業希望者は昭和49年から57年の8年間に年率3.6%増加している。就業希望者に占める割合も39.4%から50.4%へと増大している」とパート化の現実を指摘している。

では何故このように女子のパートタイム労働者が増加したかという点では明確に実証できない

が、58年労働白書の「実収入の中で妻の収入が占める割合が大きくなっており、世帯主収入の伸び悩みを補っている」という指摘が、オイルショック以降世帯主所得の伸び悩みを妻の収入で補うという経済的理由がパートタイム労働者の40%を占めているという点に相応していると思われる。そしてもしパートタイム労働者の増加が経済的理由であるならば、「正規の従業員と就業日数、時間とも同じ」というパートタイム労働者が高卒女子初任給を下回る月内平均8万6,000円という低賃金で働かされている事は生活に関わる重大な問題となる。更に61%の事業所では就業規則も無し、雇用契約も口約束という現実が女子の社会的地位を低めることにもなる。(低賃金になる要因として税制上の問題もある。)

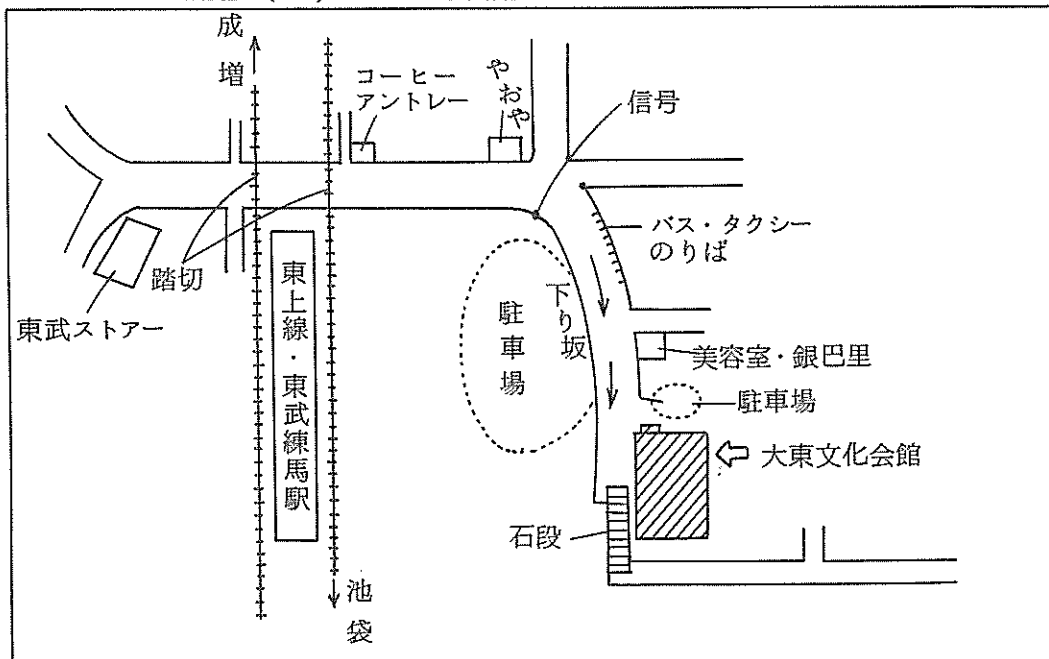
他方パートタイム労働者が増加した要因として経営側を考えることができる。パートタイム労働者は割安な労働力であり、雇用調整の対象とやすく企業の弾力的な経営に好都合である。また近年の経済状況ではサービス部門就業比率が高くなり、主婦の労働市場への再参入を促すことになるのと同時に、伝統的なフルタイム労働からパートタイム労働への移行が主婦の労働市場への参入を促す結果となる。この点は女子の職業選択の範囲を限定化する傾向となろう。

以上のように賃金・処遇・位置づけ等に関して雇用保障がほとんど無いパートタイム労働者が増加していくことは、女子労働者全体の雇用条件を低めることになると同時に、今後の雇用動向を推測して「労働力の高齢化(昭和58年全女性雇用者の68.9%が既婚者、年齢も35歳以上が55.9%)」「女子の職場出進」が一層進展する反面、雇用機会は逆に高齢者に厳しく、女性の常雇用化が困難になると予測できよう。それ故、女性の雇用安定が保障されている状況とは言い難い。しかしこのような現状に反し、労働省は、女性の職場進出は家事・育児等から解放された女性の社会参加志向であり、高齢者の就職は生き甲斐対策だとしており、働くことは「生活のため」という現実を無視している。出産・育児・家事等、女性が家庭責任の多くを負わされているなかで、夫の収入だけでは生活できないため、生計の一助として働かざる得ないのが多くの女性の働く理由である。仕事と家庭責任との両立のためパートタイム労働者という不安定な職業選択をせざる得ないのが実態である。これらを考えると、女性の職場進出がすすんでいる今日、男女平等に支えられた雇用保障を女性自身で獲得せねばならないであろう。

以上で述べたパートタイム労働に関する問題はほんの一部にすぎず、税制・年金・雇用保険等々の側面からも検討すべきであるが、機会を改めて論じてみたいと思う。

研究報告会のお知らせ

テーマ 美の鎖 ― 女が装うとは何か
報告者 駒尺喜美
日時 12月7日(土) 午後1時～4時半
会場 大東文化会館中会議室(東京都板橋区徳丸2-4-21)
池袋より東武東上線各駅停車にて7つ目、「東武練馬」下車、徒歩3分
TEL (03)-935-8512



合宿して「私の女性学イメージ」を語りませんか？

12月7日午後4時半より、上記の会場(大東文化会館)で、「私の女性学イメージについて語ろう」ということになりました。私たちは会員として、それぞれに女性学のイメージを思い描いていると思います。それを、ざっくばらんに語り合ってみませんか？ 日本女性学会の今後の方向を考えるうえでとても大事なことだと思います。

どなたでもお気軽に御参加下さい。ゆっくり、夜を徹して語り合いたいものです。
参加御希望の方は、11月30日までに、しまようこさんの方へ御連絡下さい。

宿泊費用 2,000円

寄 贈 図 書 ・ 文 献

- 月刊婦人展望 '85. 6 市川房枝記念館出版部
- 同 上 '85. 7 //
- 同 上 '85. 8 //
- 同 上 '85. 9 //
- 同 上 '85.10 //
- VOICE OF WOMEN、№63 日本女性学研究会
- 同 上 №64 //
- 地域一大家族、第24号、 「地域一大家族」編集委員会
- 国立婦人教育会館ニュース、第30号 国立婦人教育会館
- 婦人教育情報、№12 //
- 婦人情報センターだより、№21 東京都婦人情報センター
- 大学婦人協会々報（JAUW）、138号 大学婦人協会
- 婦人教育情報センター基本構想 国立婦人教育会館情報協力者会議
- 如来教救済思想の特質（抜刷）、日本史研究、№274 （浅野美和子さんより）
- 家庭科学、第52巻第1号 日本女子社会教育会家庭科学研究所
- 言語と性 英語における女の地位、ロビン・レイコフ著、かつえ・あきば・れいのるず／
川瀬裕子訳 有信堂（有信堂より）
- 日本婦人科学者の会ニュース、№56 日本婦人科学者の会

新 入 会 員 紹 介

☆ 柴田^{シズイ} 静意

☆ 景谷 峰雄

☆ 小松 満貴子

住所変更

☆ 岡沢 澄江 :

☆ 田中 由布子 :

編 集 後 記

ナイロビの話は、少し古くなりました。だが、だからといって、女性の問題も古くなったかという、そうではありません。今回はナイロビに行った方に取材しました。

さて、私の方は今回も出張校正。といっても、私が印刷所へ行くのではなく、印刷所から私の出張先へ校正刷を郵送してもらうのです。ニュース・レターが遅くなった弁解もかねて、少しばかり現状報告を！

(亀 山)

学会ニュースでは、常時、皆様からの御意見レポート等を受けつけておりますので、御投稿下さい。なお、原稿はお返ししませんので、必要な方は、コピーをおとり下さい。

発行 日本女性学会

〒350 川越市三久保町13-1 川越郵便局私書箱35号

(郵便振替口座 東京 8-49189
住友銀行日本橋支店 普通口座451169)
